

ゆにふぁんとは
労働組合の「支え合い・助け合い運動」をステップアップしていき運動。WEBサイト「ゆにふぁんマップ」への掲載による情報共有や、ボランティア・物資・資金の寄付などの募集、参加を通じて、社会貢献活動を発展させていきます。

動画公開中!

見てね!

ゆにふぁん
フォーラム



ゆにふぁん フォーラム

～想いをカタチにするために～

ゆにふぁん開設から2年。これまでの活動の振り返りと、これからの「支え合い・助け合い運動」の指針とするため、「ゆにふぁんフォーラム」をオンラインで開催しました。動画はゆにふぁんマップにて公開中。今回は、その見どころをご紹介します。いつでも、どこでも、視聴できます。ぜひご覧ください!

(本フォーラムの内容は「ゆにふぁんレポート～stand up ゆにふぁん2年のあゆみ～」活動記録としてもゆにふぁんマップ上に公開します)

① フォーラム ここが見どころ!

セッション② | [パネルディスカッション] 想いをカタチにするために

基調提起



宮本太郎
中央大学教授

パネルディスカッション



鵜尾雅隆
日本ファンドレイジング協会
代表理事



中村天江
リクルートワークス
研究所
主任研究員



畠山 薫
連合総合運動推進局
運動企画局
局長

宮本太郎 中央大学教授 (コーディネーター)

人々は、社会貢献活動に関心を持ち、参加したいという意識をもっているのに、それが寄付やボランティアなどの具体的な行動に結びついていない実態があります。ゆにふぁんは、その意識と行動をつなぐツールとしてもっと活用を広げることができるはず。パネラーがそれぞれの立場から、「参加意向と行動のギャップ解消」のための課題設定やアイデアを提起しています。

目からウロコのコトバをピックアップ!

ゆにふぁんとは、ファンド (Fund) がファン (Fan) をつくって、ファン (Fun) 楽しいこと。具体的に言えば、新しい社会問題に労働組合が多様なかたちで取り組み、それを「見える化」してつながりを広げることが求められています。さらに、そのような関係づくりを楽しいものとしていくことも大事です。

(by 宮本太郎 教授)

社員ボランティアは、個人・企業・社会にとって「三方良し」。日本では、特に働く人の領域では、ボランティアをやりたいと思っていても、できていない人がたくさんいます。人間関係が職場に集中しすぎています。でも、そんな個人を解放すれば、そこでの経験が、企業を変え、社会を変える力になっていく。まずは会社の役員や管理職がボランティアにチャレンジする「ボスポラ」から始めてはどうでしょう。

(by 中村天江 主任研究員)

パネラーの「なるほど!」とうなずかされる言葉を紹介。もっと深く知りたい方は、ぜひ「ゆにふぁんフォーラム」をご視聴ください。

寄付についてどう思いますか? 日本では、募金箱にチャリンと入れたらあとの使い道は知らないという人が少なくありません。これは、寄付ではなく、喜んで捨てる書く「喜捨 (きしゃ)」にあたります。寄付の本質は、その文字通り「寄り添って付き添う」こと。単にお金を提供するだけでなく、その相手に共感して、つながりが生まれていくということ。寄付には社会を変える大きな可能性が秘められています。

(by 鵜尾雅隆 代表理事)

ゆにふぁんマップには、広く参加募集ができる機能があります。今は、まだ活動を知らせることに留まる掲載が多いですが、この機能を活用して、「参加したい」を行動につなげたいと思います。また、結果の可視化として、マップに参加人数や活動報告、開催告知などを掲載できます。それによって「地域につながっている」「社会を変えられる」という実感を共有し、支え合い・助け合いの結節点であるゆにふぁんを深化させていきたいと考えています。

(by 畠山 薫 局長)

セッション① | 事例紹介の見どころ

これまで労働組合や連携する団体が行ってきた「支え合い・助け合い運動」。現場で築き上げられてきた様々な経験、知見を共有することは、ゆにふぁんに期待される機能の一つ。ここでは、特にゆにふぁんの活用で運動が広がった3つの事例から、編集部が見どころポイントをまとめました。

事例1 | 自動車総連



見どころ

新しいツールを構成組織として活用してみよう!

組合役員として、組合員のみならずからカンパを集めにまわった時、「何に使うの?」と聞かれた経験はありませんか?

自動車総連では、組合員のカンパを原資にした福祉活動 (車両寄贈・物品寄贈) に長年取り組んできましたが、ゆにふぁん開設を受けて、それぞれの地域の活動をゆにふぁんマップに掲載。それにより、組合員にカンパ金の使途を示せたり、寄贈先の福祉施設に喜んでいただいたりしています。地域のみならず労働組合の活動を知ってもらいきっかけにもなり、地方協議会や労連のつながりが強まったという効果も出ているとの事例報告にヒントがいっぱい!

事例2 | 連合北海道



見どころ

ゆにふぁんマップでスピーディな情報発信

連合北海道では、コロナ禍で生じる様々な問題に対し臨機応変の対応をしてきました。マスク不足の時期には「政府配布マスク等の寄付」として、地域とゆにふぁんマップで不要なマスクを募集。また、道内の女性支援団体と連携してコロナ禍で仕事を失った女性への生活用品支援に取り組み、外食需要減で打撃を受けた道産米消費拡大運動も展開。今年1月には、労福協や生協連などとともに「ほっかいどう若者応援プロジェクト」を立ち上げ、学生に食料を配布しています。スピーディに情報を発信し、広く協力を呼びかけることができるゆにふぁんマップは、そうした緊急活動の大きな力になっているとの報告は必見です。

事例3 | ユニバーサル志縁センター



見どころ

「クラウドファンディング?」な人、見てください!

ユニバーサル志縁センターでは「若者おうえん基金」を設立。ゆにふぁんを通じたクラウドファンディング (ゆにファンディング) にチャレンジし、目標を超える資金を集めることができました (月刊連合 2020年4月号参照)。

ゆにファンディングの魅力については「単に寄付を集めるだけでなく、全国のみならず活動を知ってもらい、応援してもらうことができました。ゆにふぁんを通してキャンペーンが盛り上がり、支援がどんどん広がっていくのを実感しました」と、体験した方ならではのコメントを語られています。クラウドファンディングが身近になります!

ゆにふあんフォーラムを起点に 新しいステップへ

ゆにふあんは、この2年間で「活動の見える化」を実現。次なる課題は、志を同じくする人たちとの連携、参加、参画につなげ、やりがい、喜び、共感することで、主体的な社会課題解決の行動へとつなげる。ゆにふあんフォーラムで確認した「現在地」から、次のステップへのロードマップをどう描くのか。ゆにふあん担当局長で、フォーラムのパネリストを務めた島山薫連合運動企画局長に聞いた。

ゆにふあんを通じて深まる絆

「この2年間で振り返って思うことは？」

連合は「愛のカンパ」を通じてNGO・NPOの支援を行い、また東日本大震災をはじめとする自然災害からの復興・復旧支援にも総力で取り組んできました。そうした支え合い・助け合い活動の蓄積をさらにステップアップしていくために、連合結成30年の節目に「ゆにふあん」を開設。組合員と地域の人々がつながり、地域の課題を解決していくなか



島山 薫
連合運動企画局長

で、「ユニオンのファンを増やしたい」という願いも込めて「ゆにふあん」と名付けました。

2年が経過し、現在、ゆにふあんマップに掲載されている活動は400件超。様々な助け合い・支え合い活動が見える化され、「労働組合が身近に感じられるようになった」との声も届いています。改めて画期的な仕組みであると思います。

新しい生活困難を 解決するツール

「ゆにふあんフォーラムで確認した運動の「現在地」と次のステップとは？」

開設から半年ほどで新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起きました。宮本先生の基調提起にありました通り、コロナ禍は、女性や若

者など弱い立場の人々を直撃し、セーフティネットの綻びを浮き彫りにしました。従来の生活保障制度は、安定雇用と標準世帯を前提に構築されましたが、不安定雇用が拡大し、制度のはざまにこぼれ落ちてしまう人が増えていた。そういう人たちがコロナ禍で一気に困窮しました。また豪雨などの自然災害も全国で頻発しています。想定外の事態で起きる生活困難にいかに対処するのか、制度のはざまのニーズにいかに対応するのか、今、問われています。

そういう局面で、ゆにふあんがめざした「支え合い・助け合い」の姿はからずとも実証され、デジタルネットワークの「つながる力」「見せる力」が実感されるようになりました。既存の制度が対応できない新しい生活困難を解決するツールとして、ゆにふあんをステップアップさせ、労働組合の新しい活動につなげたいと考えています。

もう一つは、一人ひとりの想いをカタチにすること。連合の「多様な社会運動に関する意識調査」(2021)では、金品支援(寄付)やクラウドファンディング、ネット署名などの社会運動に「参加したい」人

が特に若い世代で多いことがわかりました。でも、「参加経験」は少ない。このギャップをいかに埋めるかが課題ですが、まさにゆにふあんを活用すれば、「参加したい」という想いを行動にマッチングさせることができ。自分たちの行動で社会が変わるという経験をゆにふあん運動の原動力にしていけたらと思っています。

新しい関係性を 生み出すきっかけに

「読者へのメッセージを

ゆにふあんマップをのぞいてみてください。身近なところでこんな活動が行われているのかと新しい発見があるはず。そこから気づきやアイデアが得られるかもしれません。労働組合活動で培われた経験や行動力、判断力、連帯意識、思いやりの心は、地域課題の解決や災害時の救援活動においても大きな力になります。

コロナ禍を経験し、労働組合にも新しいスタイルの運動が求められています。社会課題は山積していません。ゆにふあんを通じて、社会を変え、行動へ一歩踏み出してもらえたらうれしいです。